

笛落虎繞

古橋桂花著



旅 の 随 筆

続 虎 落 笛

古 橋 桂 花 著

隨筆 続虎落笛 定価 一、三〇〇円

昭和四十九年十二月一日 印刷

昭和四十九年十二月十日 発行

著 者 古 橋 才 次 郎

浦和市岸町四一八―一二

印刷所 (資) 秀飯舎印刷所

大宮市大字飯田七〇

発行所 埼玉県俳句連盟

目次

原城の跡	一
萩の城下	七
高山祭	七
竜華寺と清見寺	三
二本松の秋	元
函館	六
旅	四
田原坂に立つ	九
伊予の松山	四
身延山	七

佐渡の秋	八四
松 前	九〇
出 雲 路	九八
奥 嵯 峨	一〇九
北 浜 名 湖	一一六
良寛の跡を訪ねて	一二三
北津軽の秋	一三四
唐津の周辺	一四一
葵まつりを見る	一五〇
奥 秩 父	一五五
釧路から網走へ	一六四
高 野 山	一七三

能登の旅	一七八
天竜下り	一八四
鎌倉	一九〇
戸隠	一九九
三峰神社	二〇四
明日香村を歩く(その一)	二一〇
明日香村を歩く(その二)	二一八
謙信の塩送り	二二九
白河夜舟	二三四
太田窪の鰻屋	二四二
若き日の上海	二四八
ブインの夕陽	二五七

維新散華……………	二六
その前夜……………	二六
敗戦……………	二九
高松宮殿下と私（後記に代えて）……………	三〇
装幀……………	
著者……………	

原城の跡

諫早に着くと、乗換え五分待ちで島原線の列車が発車した。列車と言ってもディーゼルカー一輛きりである。

島原半島の東海岸を半周して、半島の南側の原城駅で下車する。駅長が切符売りを兼ねている小さい駅である。

ここまで一時間五十分、途中は雲仙嶽の峨々とした風景がいつも右手にあり、左側には波靜かな有明海がある。雲仙の裾の狭い平地が蜜柑畑や甘藷畑になっていて、田圃はところどころにしか見えない。

乗り降りする中年の女は、殆んどが労働者で、皆日に焼け、魚の籠を持ったり箆を下げたりしている。

旅のものらしいのは私一人で、駅に停る毎にその顔ぶれが変わってゆく。隣に坐っていた老人がつと立ち上って、向う坐席の老人に、「さっきのことよかですたい」と言い残して降りていった。

原城の駅前に、図を書いた大きな看板が立っていたが、一軒あった茶店で、近道というのを聞いて炎天の道を歩き出した。

家並をはずれると、海岸の方に高さ百米位の丘陵が見える。これが原城の跡である。こちら側は田圃をへだてて断崖となつて居り、昇り口はないように見える。

この辺の農家は皆牛を飼っている。島原牛とでもいうのだろう。そういう農家がところどころにある。

丘陵の右の方に廻って行き、海岸沿いの乾いた坂を登って行くと本丸に達した。駅から二十分以上歩いたような気がする。

本丸のすぐ下に空壕があり、その立札には次のような説明がしてあった。

「籠城のさい壕の一部をうめて通路とし、あとに残った空壕を木の葉や茅でおおい、老人や子供をかくまった」と。

空壕の少し上の道ばたに、ホネカミ地蔵というのが立っている。立札によると、戦のあとに

散乱した白骨を集めてまつたもので、萎れた野の花が供えてあった。

骨かみ地蔵に花あげる

三万人も殺された

小さな子供もいたろうに

骨かみ地蔵に花あげる

と、この辺では唄われているそうである。

本丸の跡はかなり広く、海に面した方は断崖になって居り、霞のかかった有明海の波の上には、天草の島々が夢のように浮かび、うしろを振り返れば、雲仙嶽が巖然として間近に据えている。

大きな十字架が建っている附近に、数基の墓が並んでいる。近づいて見ると一番小さな墓石の傍に、天草四郎時貞の墓としるした立札が立っていた。

十字架のたつ本丸やきりぎりす

この城に一揆が立籠った時は、廃城になってから十九年目であった。

始めは、有馬貴純が明応五年（四六五年前）に築城した。その有馬氏がのち日向に転封され、新領主として来た松倉重政がこの城をこわし、はるばる城壁の石を運んで、半島の東岸に森岳

城（島原城）を築いてそちらに移った。

この当時はひどい凶作であった上に、課役と重税とが、厳しいキリシタン弾圧と重なって、島原の乱が勃発したと言われている。

キリシタンに対する弾圧は随分ひどかったようだ。裸にして吊り下げたり、熱湯をあびせたり、海にほうりこんだり、或は手足をしばった上から蓑を着せて火をつけたり、或は雲仙の火口にほうり込んだり、色々と記録やひどい話が残っている。

島原に起った一揆に呼応して、天草勢も同時に起ち上った。天草では小西行長の浪人と称する、大矢野松右衛門、千束善右衛門、森宗意らが、同じ浪人益田甚兵衛の子、四郎時貞を押してて蹶起した。寛永十四年、今から三三五年前のことである。

島原勢はまず森岳城を囲み、天草勢は富岡城を囲んだが、ように陥落せず、そのうちに討伐軍が迫ったので、島原のこの原城の跡に立籠って抗戦したのである。

ここに集まったものは、女子供もまじえて、島原勢二万三千人、天草勢一万四千人といわれている。

十六才の美少年天草四郎時貞を盟主とし、籠城軍を指揮したのは浪人四十人と推定され、その下に庄屋が居り、これが同じ村の農民たちの統制にあたった。この廃城に立籠ること八十八

日、糧食、弾丸ともにことごとくつき、全員神の名をとえながら原城の露と消えたのであった。

戦がすんでから、時貞の首というのが沢山出てきた。熊本の細川氏がその母親を捕えて居ったので、その首実験をさせたという。どれを見ても母は平然たるものであったが、五つ目か六つ目の首を出された時、顔色を変えて泣き伏したという。

戦というものは罪なことをするものである。

この事件で幕府は誤りを二つおかしている。一つは「たかが土民の一揆」と、始め簡単に考えたことである。土民の一揆でも、こと宗教に関するものは、そんな簡単なものではない、ということとは、古くは一向一揆の例でもよく判っていた筈である。

次の一つは上使として板倉重政を派遣しながら、鎮圧が長びくと称して、松平信綱をその上の大将として送ったことである。

これは板倉にとつては死ねということである。その通りに、重昌は信綱の到着する三日前、総攻撃の命令を発し、先頭に立って死の突撃を敢行して了った。

こういう例は日露戦争の時にもあった。旅順がなかなか陥落しないところから、乃木司令官を更迭すべしという議があった。併し明治天皇はこれを承認されなかった。こういうところが

明治天皇の名君たるゆえんである。

若し司令官を更迭したら、新司令官が着任する前に、乃木さんは無理にでも戦死していたであらうからである。

次に誤りというのではないが、十二万もの大軍をもって包囲しながら、原城がなかなか陥落しないので、平戸にいたオランダ人に頼み、海上の船から、或は海岸の砲台から砲撃を加えてもらった。

しかし折角の思いつきも、やはり効果が上らなかった。それよりも、日本国内の内乱をしずめるために、外国人の力を利用したことは国辱である、という非難が上がり、これは幕府の大きな失敗となった。

また遠く日向から坑夫を呼んで、丘陵の腹に隧道を掘らせ、包囲軍はその坑中を進んだが、籠城軍に気づかれて失敗に終わったという話もある。日露戦争中に、旅順の二〇三高地でも同じようなことがあった。

困った時に人の考えることは、いつの時代でも同じようなものであるようだ。

空蟬や哀史とむむる城の石

萩の城下

萩は、江戸時代の典型的な城下町の形を今に保っている。瓦町、呉服町、米屋町、塩屋町、魚店町、細工人町、職人町、寺町などと、昔の町が良く残されているので、日本の古都の一つに数えられているという。

人口は五万三千だが、町のなかに東萩、萩、玉江と国鉄の駅が三つもある。

急行は東萩に停るので、私は東萩に下車した。市内の観光地図を買って見ると、駅のすぐ東の地区に松陰神社がある。そこからまず訪ねることにした。

境内には、松陰が幽閉されていた生家の杉家と、松下村塾の家屋が保存されている。

この村塾は、はじめは杉家の小屋を改造して、八畳一間であったものを、のちに十畳半の室を、師弟一体となって増築したものである。

松下村塾の名前は、松陰の叔父の玉本文之進が、弟子を集めて授業を行った時、堂に付けた偏名で、後に外叔父久保五郎左衛門が、その塾名に使い、それを更に松陰が襲用したものである。

松陰が松下村塾を開いたのは、安政三年八月、松陰二十七才の時であった。

安政二年の暮に野山の獄を出て実家の杉家に幽居し、表向きは他人との交遊を絶っていたが、密かに来って教を乞うものがあるという有様だったので、翌年八月に、半ば公然と塾を開くことにしたのである。

村塾は安政五年十二月、大獄に連座して、松陰が再び獄に投ぜられるまで、約二年半の間開かれていた。

この間に松陰の薫陶を受けたものは、約五十名であったが、その人達は皆国家多難な時に、その推進力となっている。

塾の経費は杉家と松陰の自弁で、月謝などは取らず、松陰は門下生と塾に起居を共にしていた。一定の授業時間というものもなく、弟子が来れば講じ談じ、年中休日なく、興が乗れば夜も徹することもある、というやり方であった。

松陰は主として古事記伝、大日本史、経書、兵書の真隨、史論の時代化、時局対策などを中

心に、師弟ともどもに考え練る、というやり方であり、時には弟子と一緒に、米を舂き糠をふるい乍ら、会談し時局を談ずることもあった。

その教育は、肌から肌へじかに訴えるものがあり、師弟の情は誠にこまやかで、先生を思慕するの情は、門人達の胸に深く刻み込まれていた。

門人の書いたものによると、

「先生門人に書を授くるに当り、忠臣孝子身を殺して節に殉ずる等のことに至るときは、満眼涙を含み、声ふるわし、甚しきは熱涙点々書に滴るに至る。是を以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る。又逆臣君をくるしめますが如きに至れば、目眦裂け、声大にして怒髪逆立するものゝ如し、弟子亦自ら之を惡むの情を發す。」と。

教育というものはこれが本当であり、こういう教育でなければ偉人など出るものではない。

半ば公然の塾とはいっても、幽閉中の罪人であったので、若者たちが塾に通うのを嫌う父兄もあり、弟子たちも塾へ通うのに苦勞があったようである。それだけに集まるものは皆優秀な者ばかりであった。

高杉晋作が久坂玄瑞に送った書簡を見ても、家にかくれて夜こっそり通っている、とある。松陰の書いたものの中にも、

「高杉生既に夜にしてすなわち来る。家頗るその宵行を疑い、ほしいままに出るを禁ずと言う。その情笑うべし、慙むべし。」と。

また、父兄のうちには読書の稽古はよいが、政治向きのことを議するのを禁じたものも居った。

しかし松陰の政治向の議論は、特に門人達を引きつけたようである。

松陰は二十一才で、初めて九州各地に遊び、江戸に出て更に水戸に遊び、二十三才の正月から、白河、会津、新潟をめぐり、佐渡、弘前、青森、盛岡、仙台、米沢を歩いた。

一時萩に帰ってから、二十四才にしてまた旅に出で、讃岐、摂津、河内、大和を経て伊勢大廟に詣で、次で中山道の各駅を尋ねて江戸に這入った。

ここで海外渡航を企図し、長崎に来ていたロシアの軍艦を訪ねるつもりで、九州に向った。大阪から船で熊本に渡り、長崎に着いた時は既に露船は出港したあとであった。

そこで一旦萩に帰り、また間もなく江戸にのぼった。その後二ヶ月、ペリー提督の軍艦に乗せて貰うために、艦を追って神奈川で果さず、下田に行つて遂に決行したが、失敗して江戸の獄につながることになった。その時松陰は二十五才である。

投獄半年ののち、萩の在所に蟄居申付けられたが、萩では幕府に気嫌ねして約一年間野山の